

Contents

支部活動報告

- 2009年度日本建築学会北陸支部総会記念講演報告
[「民家はどのように造られてきたか - 経済合理性からみる民家の歴史 -」](#) 平山 育男
- 2009年度日本建築学会北陸支部大会シンポジウム報告
[「こどもとけんち-みらいへつなく」](#) 丸谷 芳正 (広報部会長)
- 「アーキニアリング・デザイン展」巡回展(北陸支部)の報告 西村 督
- JIA-KIT建築アーカイヴス開設記念会 山崎 幹泰
- 2008年度 北陸建築文化賞 受賞にあたって
[子どもたちのための古民家再生](#) 佐藤 茂
[新旧のコラボレーション](#) 水野 一郎
[北陸の建築文化をうけて生み出された福井市至民中学校](#) 柳川 正尚
[鯖江市中河小学校・鯖江市環境教育支援センター](#) 吉田 明弘

支所だより

- 新潟 [石造による雪室の展開](#) 黒野 弘靖
- 石川 [アルミハウスプロジェクト](#) 宮下 智裕
- 長野 [素材の妙?](#) 五十田 博
- 福井 [建築素材の再発見 赤瓦](#) 国京 克巳


シリーズ

- 学生(福井) [私の景観研究の始まり](#) 長田 亜美
- 学生(富山) [学生による語り合いのシンポジオン2009を終えて](#) 加藤 智子
- 学生(新潟) [設計コンペを通じて](#) 斎藤 淳之
- いきいき街づくり(石川) [地域志向型のまちづくり支援の試み\(福井県福井市と池田町における事例\)](#)
内田 奈芳美
- かくれた建築(長野) [稲核の風穴群](#) 梅干野 成央

お知らせ

- 建築文化週間事業イベントのご案内
 - (1) 10月10日(土) 講演会(石川) 「加賀の建築」
 - (2) 10月11日(日) ワークショップ(富山) 「第5回 集合!みんなはたてもの探偵団」
 - (3) 10月31日(土) 講演会(富山) 「幕末から現在まで -北陸の和風建築の流れ-」(仮称)
 - (4) 10月31日(土) 講演会(富山) 「北陸の建築文化と宮大工」(仮称)
- (1)~(3)の詳細については[こちら](#)をご覧ください。
- (4)の詳細については[こちら](#)をご覧ください。

- 新建学校 in 石川 日時:10月31日(土) 場所:金沢工業大学
下記講演会が実施されます。
 - ・「デザイン運動小史」 本多昭一氏



・「フランク・ロイド・ライトの住宅デザイン」 三沢浩氏
詳細については[こちら](#)をご覧ください。

○2009年度 北陸建築文化賞 募集について

- ・[こちら](#)から応募要項と募集要項をダウンロードできます。
- ・応募期間：2010年1月12日（火）から1月29日（金）17：00までに必着

○賛助会員を募集しております。詳しくは下記事務局までお問い合わせの程お願いいたします。

(社)日本建築学会 北陸支部

〒920-0863 石川県金沢市玉川町15番1号 パークサイドビル3F

Tel: 076-220-5566 / Fax: 076-220-3344 / E-mail:ajj-h@p2222.nsk.ne.jp

(平成21年10月6日(火)発行)

「民家はどのように造られてきたか －経済合理性からみる民家の歴史－」

講師： 平山 育男（長岡造形大学 教授）

2009年5月16日（土）に新潟工科大学にて日本建築学会北陸支部総会が開催され、通常総会終了後記念行事として長岡造形大学教授の平山育男氏による講演会が開催された。参加者は建築学会員だけでなく、新潟工科大学の学生や一般の方などを含め、158人と盛会であった。

まずは同姓同名の有名人とご自身の写真を並べる自己紹介から始まり、和やかな雰囲気であった。平山先生の工学博士の学位研究時代は寝殿造がテーマで文献を調査する世界であったが、在籍した早稲田大学での文化財修復の現場で、部材の一つ一つ見て調べるまったく違う世界を経験したことから建造物保存の世界に入った。民家は近づきたいものと思っていたが、多摩ニュータウンに隣接する東京都稲城市の民家の調査をきっかけに、民家はどのように残ってきたのか考えるようになったという。度重なる改造があり、生活の要求があり、時代が求める形があり、変化していった民家の歴史には加えて「移築」という要素が見え隠れした。しかし、自身、「民家の移築」がどのようなものであるのか分からず、この研究を新たに手掛けることになったという。

宮本常一先生が「昔は村の1割か2割はそうした家（移築）ではなかったかと」という言葉を残していた。東京都、神奈川の事例を調べると少なくとも13%が移築の民家であり、宮本先生の言葉が裏付けられた。移築の理由は火災・災害が多く、分家に際し購入する場合もあった。移築の距離も徒歩1時間（4キロ）圏内が多く、移築までの期間は平均77年（3世代）であった。また、移築が行われた時代は20世紀前半までだが、古代・中世の時代も移築が盛んに行われ20世紀後半から少なくなることを明らかとした。

移築が行われた理由として、木材の刻みが終わっていることの経済性と徒歩圏内の地域社会で成立していることが挙げられるという。移築は質の担保、迅速、安価という経済合理性に合った行為であり、翻って日本全国で行われていたと見なせる。特に富山県は30%石川県は26.1%と移築の割合が多い。これは加賀藩の新築制限の影響と見たい。次いで鹿児島、宮崎と続くのは分棟型の故か。また、合掌造りは2,3回移築が行われるものも散見されるとした。

しかし、民家の移築は無くなった。何故なのか？ 民家は近代どのように変わったのか？ 古材利用の基本は「もったいない」ということと言う。上棟までにおける建築費の1/3は材料製材、木挽き手間であった。ところが電気の供給が始まった大正時代あたりから過酷な労働であった手挽きが機械挽へ変化した。手挽の100倍速、手間賃は2分の1ということで、材木が比較的安価に手に入るようになり、その結果古材使用が減ることとなったとする。同じように和釘から洋釘への変化もあった。釘を使わない木組みの伝統構法は高い金具（釘）を使わないことも理由として考えられたが、安い洋釘はその理由を逆転させたとする。

つまり大量生産大量消費を可能にした産業革命以降、移築は激減したとする。また、木材や金物を安価に提供できる建築工業化の経済システムの中で移築の選択肢は少ない。カタログから窓、床材、天井材、壁紙といった部品を選び組み立てる、これが建築だろうか？と平山先生は最後にわれわれに質問を投げかけて講演を結んだ。平山先生の言うように今は当たり前のこととして店に行



講師近影



図1 研究の切っ掛けとなった稲城市森家住宅
18世紀初期に建てられたものが明治時代初期の火災後、2km程の地から移築された。



図2 柏崎市 黒崎家住宅
中越沖地震で倒壊。明治時代中期の火災後、移築された土蔵造の町家



図3 長岡市 川上家住宅
大正5(1916)年の新築であるが、小屋組は古材を用いる。



図4 長岡市 朝日酒造松頼閣
昭和9(1934)年建築。壁、天井に工業製品にアールデコの意匠と工業化社会における住宅建築のあり方を先進的に示す。

き服を買う。民家の形成に関わる問題を研究することは我々の問題を振り返るきっかけとなる。吉野家の「安い・早い・うまい」にもうひとつ大切な何かを加える必要がありそうだ。（記：広報部会長 丸谷芳正）

2009年度日本建築学会北陸支部大会 シンポジウム報告 こどもとけんちくーみらいへつなぐ

丸谷 芳正
(富山大学 教授)

2009年7月11日(土)から12日(日)にかけて富山大学五福キャンパスにて日本建築学会北陸支部大会が開催された。初日の午後2時から「こどもとけんちくーみらいへつなぐ」というテーマで記念シンポジウムが開かれた。新潟大学教授の五十嵐由利子氏、富山大学人文学部准教授の大西宏治氏、福井大学工学研究科の粟原知子氏の3名の方にパネラーとして参加していただいた。コーディネーター役をつとめたのでここに報告いたします。参加人数は80人で建築分野以外の子どもの教育に関わる方々の参加もあり普段の建築学会のシンポジウムとは一味違う雰囲気であった。

まず、コーディネーターから「こどもとけんちく」という今日的な問題に対して我々がどう関わっていくべきか、このシンポジウムをきっかけに問題意識を共有したいという趣旨説明のあと各パネラーの発表ではじまった。

五十嵐由利子氏からは、長年実施されてきた新潟支所の「親と子の建築講座」の経緯を報告された。1992年の日本建築学会新潟大会で開催され、「建築と子どもたちネットワークにいがた」が実施された。翌1993年から実行委員会を組織し今日まで新潟支所主催で毎年3回の「親と子の建築講座」が実施されてきた(2008年からは建築学会本部の意向で「親と子の都市と建築講座」に変更)。講座の主旨は、建築の専門家からの面白い説明や楽しい体験を通して都市や建築を支えている技術を理解すること、生活環境全体を考える環境教育として、さらに地域社会における学校外教育としての受け皿作りとして位置づけ定着させることを目指した。まちなみ探検、実験と創作などこれまで51回の講座が開かれた。毎回、2時間の講座で休みもとらず没頭する子どもたちの姿が見られた。割り手として使い手として子どもたちに「驚きや感動」を与えることが重要であり、そのためには効果的な学習過程が大切で、感性・理解・認識、思考・判断、表現・行動・実践という4段階の過程を取り入れることで子どもたちにより影響を与えることができるのではと考えるようになった(AhI34号参照)。

大西宏治氏からは「子どもがまちを知る活動ー地理学からみる地域安全マップー」というテーマで報告された。子どもを事故や犯罪の危険から守ろうと、通学路の見回りなど、地域社会ではさまざまな取り組みが行われている。その取り組みひとつに地域安全マップづくりがある。子どもたち自らが地域を調査して危険な場所を知る活動である。入りやすく見えづらい場所など犯罪発生の可能性が高いところを見出す力を要請することにはねらいがある。かつてのコミュニティでは子どもたちは自分の暮らすまちを濃密に体験することで社会の仕組みを知っていた。しかしながら、現在のまちでそのような体験をすることは困難であり、地域安全マップづくりは子どもにまちを知ってもらえる試みにもなっている。2006年名古屋千種区富士見台小学校で行った安全マップづくりの取り組みでは子どもだけでなく大人にも地域を見る力を要請できることを確認できた。この分野で地理学が貢献できる部分も大きい。地域を調べた結果、子どもたちが犯罪に関するだけでなく、地域のなかの楽しい場所などをあわせて調査して、地域住民と情報交換することがあれば地域への愛着が増すことも期待できる。

粟原知子氏は「子どもの生きる力を育てる遊びの大切さと その環境づくり」というテーマで報告された。まず、子どもの遊びには身体的発達・社会的発達・精神的発達という発達があり、人間と場所という関係性の中で遊びという創造行為を繰り返す。このことで自分を知り、環境を理解する、つまり遊びで成長するという。現在の子どもの遊ぶ力を失ったかもしれない。身近にあった自然環境や空き地が減少し、代わりに管理された公園等の遊び場が変わった。自然や本物に触れ合うことが少なくなった。では、子どもの遊ぶ力を引き出すどうしたらよいだろうか、事例を交えて説明された。空き地を提供すること



図1 シンポジウムのポスター



図2 シンポジウム風景

で創造的な遊び、自然遊びを増加させた事例、園庭を緑化させた保育園の事例などをあげた。大人も遊びに関する知識をもつ必要性があり、また管理しすぎないよう気をつけなければならない。また、大人の気配を感じながら安心して遊べる環境や自然を残し自然を生かす遊び場づくりは子どもの遊びや創造性を育むにはとても重要である。

パネラーの報告の後、会場との討論が行われた。まだ「こどもとけんちく」というテーマは議論の端緒についたばかりである。新潟支所の長年継続した活動の意義は大きく建築というテーマを通して地域の子どもたちに与えた影響は大きい。安全マップづくりはまちが本来もっていた場の力を取り戻す必要があると気づかされた。子どもの遊ぶ力を引き出す環境づくりはまさしく建築学会の大切な活動のひとつとして捉えられる。今後も支部として取り組んでいく必要性を会場の方々に共有することができた。

「アーキニアリング・デザイン展」巡回展（北陸支部）の報告

西村 晋

（金沢工業大学 環境・建築学部建築系 准教授）

本展覧会は、建築（アーキテクチャー）の設計・生産を支えるエンジニアリング・デザインをアーキニアリング・デザイン（Archi - Neering Design）と呼称し、模型によって歴史的発展過程から、未来の建築へ向けての示唆と提案をしようと意図して企画されたものです。

開催場所は、金沢駅もてなしドーム地下広場です。展覧会の内容は、5/14（木）～5/20（水）の7日間の模型展示と5/17（日）の講演会です。模型は約120点の建築構造の仕組みがわかるように工夫された模型が展示されました。開催初日の前日に、日本建築学会本部を代表して日本大学 宮里直也先生と学生、日本建築学会北陸支部は金沢工業大学建築系の研究室、そして日本建築構造技術者協会(JSCA)中部支部北陸部会の総勢約40名で設営を行いました。展示された模型の大半は全国の大学生が作成し、本展覧会では、金沢工業大学建築系学生の意欲的な作品も数点展示しました（写真1, 2）。また、日本建築構造技術者協会からは、建築構造設計士の業務、建築構造の仕組み、JSCA賞作品のパネルが展示されました。5/17には、斎藤公男日本建築学会会長、飯嶋俊比古氏（株式会社飯嶋建築事務所 代表取締役）、望月利男氏（太陽工業株式会社 技術顧問）の三名に講演をしていただきました。斎藤公男会長は「空間と構造」-世界遺産はなぜおもしろいか」と題して、本展覧会の趣旨と古今東西の建物の特徴を説明していただきました（写真3）。飯嶋俊比古氏には、「新しい建築材料 -アルミニウム- のテクノロジー」と題して、アルミニウムが建築構造材料として現在に至るまでの技術革新や建築作品を紹介していただきました（写真4）。望月利男氏に「新しい建築材料 -膜- の歩みと未来」と題して、テントが膜構造として認知されるまでに歩んできた技術開発と地球環境を配慮した21世紀の膜構造の姿について説明していただきました（写真5）。講演会後は、建築関係の仕事に従事されている方々が三名の講師と意見交換をされており、建築デザインおよび建築技術の動向を発信するよい機会になったと思われま。講演会当日の来場者数は569人、講演会では150人を超える市民の方々が聴講され、非常に盛況でした。7日間で来場者数は延べ1,662人、幅広い年齢層の方々に来ていただきました。

最後に本展覧会を無事、終わることができましたことに対して、関係諸団体、関係者各位に心より御礼申し上げます。



写真1 会場の様子



写真2 会場の様子



写真3 斎藤先生の講演



写真4 飯島氏の講演



写真5 望月氏の講演

JIA-KIT建築アーカイブス開設記念会

山崎 幹泰

(金沢工業大学 環境・建築学部建築系 准教授)

「JIA-KIT建築アーカイブス」は、急速に失われつつある戦後日本の近現代建築の設計図書を収集、保管、研究、公開するため、社団法人日本建築家協会(JIA)と学校法人金沢工業大学(KIT)の共同により2007年3月に設立された。

その設立の意義と活動内容を広く周知するため、2009年4月25日(土)、金沢工業大学において、「JIA-KIT建築アーカイブス開設記念会」を開催した。建築家・東京大学大学院教授・内藤廣氏の基調講演「建築設計ノート」、および「現代建築文化のアーカイブス」と題するパネル・ディスカッションを行った。併せて、4月24日(金)~30日(木)の一週間、同大学ライブラリーセンター展示室において、収蔵品である「Nコレクション」の展示会を行った。

内藤氏の講演は、約400名の聴衆を前に、フェルナント建築事務所、菊竹事務所時代の建築家のスケッチの思い出話から始まった。自らの設計ノートであるA4版サイズの能率手帳を手に取りながら、スケッチも全てこれに張り込むため年末には倍ほどの厚さになること、こうしたやり方を20年以上続けていること、などを紹介しながら、学生たちも自らのスケッチのスタイルを確立することの重要性を語った。

次に、パネラーの大字根弘司氏(JIA建築アーカイブス委員長)、竺覚暁氏(KIT建築アーカイブス所長)、内藤廣氏、およびモデレータの水野一郎氏(金沢工業大学教授)の計4人により、建築アーカイブスに関するパネル・ディスカッションが行われた。

まず水野氏より、JIA-KIT建築アーカイブスの設立に至る2003年頃からの経緯が説明された。

続いて「Nコレクション」の寄贈者である中村敏男氏のインタビュービデオが放映された。「Nコレクション」とは、雑誌『a+u』を創刊した中村敏男氏が収集した、世界的に著名な建築家の図面やドローイングなどのコレクションである。『a+u』の取材活動を通して知り合った、建築家とやりとりした膨大な量の手紙がその始まりだった。親しくなるにつれ、取材中に描いてもらったドローイングなどをいただく機会が増え、大きなコレクションとなった、しかし25年務めた雑誌の編集長の仕事をやめる際に、その手紙は全部捨ててしまい、今では残念に思っている、といった経緯が明らかにされた。

ビデオ終了後、まず大字根氏より、日本の建築文化や景観を育成する、その基盤整備としての建築アーカイブスの意義を語った。また竺氏からは、欧米の建築アーカイブスの現状について、スライド上映を交えて報告が行われた。内藤氏からはキュレーターの育成に関する問題、建築著作権に関する問題、公共工事において行政に収められた原図の保管状況に関する疑問など、今後取り組むべき課題が提示された。

記念会終了後には、パネラーを囲んで交流会が行われた。参加した学生たちとの間で、積極的な質疑応答が行われ、盛況のうちに会は終了した。

建築アーカイブスに関し、今後取り組むべき課題が明らかになり、また関係者の中で問題意識の共有を図ることもでき、大変有意義な会であった。



図1 「Nコレクション」展示会場



図2 内藤廣氏の講演



図3 中村敏男氏のインタビュービデオ



図4 パネルディスカッションの様子



図5 交流会で内藤氏を囲む学生達

受賞（業績）：子どもたちのための古民家再生
受賞者：子どもたちのための古民家再生委員会
（代表 佐藤茂・会長 小幡和雄・技術顧問 平山育男）

子どもたちのための古民家再生

文：佐藤茂（子どもたちのための古民家再生委員会 代表）

子どもたちのための古民家再生委員会会長の佐藤茂です。私は長岡市で豆腐店を営んでいます。この度は栄えある北陸建築文化賞を授与頂き誠にありがとうございます。私達の活動は、朽ち果てる寸前であった1軒の古民家をボランティアの力で葺き替え、再生を行い、子どもたちの拠点としたものです。ここでは6年間にわたって行ってきた活動の内容を紹介することで、授与の内容をお示ししたいと思います。

私たちの活動は2003年に遡ります。この時、私たちは今にも朽ち果てそうな1軒の茅葺民家と出会いました。この民家と周辺の自然環境を見たとき、「まさにふるさとのイメージだ」と思いました。今、失われそうなこの環境を保全し、青少年がこの自然の中で様々な体験をすることを通して、豊かな人間性が培われるのではないかと思います。そのような考えではじめたのがこの委員会です。つまり活動は古民家の復原と子どもたちと自然環境の交流、という趣旨です。敷地は新潟県刈羽郡刈羽村の飛び地となる油田地区。活動の場所は2本の谷筋と正面に広がる田圃、背後の小高い丘陵地です。即ち、民家を拠点として周囲の里山環境そのものがその範囲となるのです。

私達の活動では、第1に茅の葺き替えを行う茅の調達から始めました。一般から募ったボランティアの方々延べ数百人がこの作業に携わりました。秋の間に刈り取った茅は来春のため敷地前にまとめて積み上げ、冬を越えました。冬期間は雨漏りを防ぐため古民家の屋根はシートで養生をし、春になり古い葺材を剥ぐ作業を行いました。2004年の春から本格的な茅葺き替え作業の開始です。人力により材料を建物まで運び込み、茅葺で中心となって作業を行って頂いたのは作業前まで残っていた昭和40（1965）年代最後の茅葺き替えを行った職人の方々でした。小屋組でも一部の腐朽材はボランティアの大工職にお願いして交換をしていただきました。このようにして活動を行うことの出来る拠点の民家が完成しました。

さて、活動の足場ができたので、2004年以来、子どもたちのための活動を開始しました。民家前の休耕田では稲作を復活させました。田植えでは最初は、遠巻きに見ていた子どもたちも次第に打ち解け、泥にまみれて作業を始めました。6月、草むしり。9月に行ったボランティア総出の稲刈りでは、運搬、ハザギ掛けまで周辺環境を生かした一連の作業は人力を中心に実施し、収穫物を通して里山における循環を実体験するとともに、里山景観の形成も試みました。

2005年からは、朝日酒造こしじ水と緑の会などからの助成も受け、これまでにご紹介した活動に加え周辺環境を更に生かした活動に取り組んでいます。その1つが、ホタルの住む環境づくりです。水路の柵を設け、田圃の中には木道を敷設しました。それらの環境整備の成果を受け、6月末にはホタルの鑑賞会も実施しました。加えて、古民家周辺地域における動物・植物の分布生息調査も実施しました。調査対象は、



図1 再生された古民家と周辺の環境



図2 再生された古民家の内部



図3 再生前の古民家



図4 ボランティアによる古民家の再生

①体験学習において利用できる可能性があるいきもの

②観察対象として興味を引くようないきもの

としました。季節を分けて実施することにより、個体及び個体数などの変遷を比較し、当該地における棲息実体を把握しました。鳥類をみると古民家の周囲には少なくとも45種類の野鳥を見ることができました。

そしてこれらの調査を受け、民家を活用する活動の体験プログラム充実を図ることが可能となりました。その一つが野鳥や動・植物の観察です。これは民家の修復により、子どもたちを中心とする宿泊体験が可能となり、早朝における周辺地域における野鳥や昆虫の観察もできるようになりました。観察会では先ず講師の先生から周辺地域の説明、いきものについての解説を頂き、隣接する草むらや、裏山において活動を行うことで子どもどうし、周辺環境で遊ぶ姿が見るようにもなり、時間の余裕から会話も弾んで生きた交流が出来ました。また、家族揃って巣箱の作成も行いました。この巣箱を周囲の里山に掛けるとともに鳥たちの餌となる食物の栽培も実施しました。なお、宿泊体験ではカマドを使った夕食づくりや様々な体験実習、裸の付き合いも可能となり、深く自然と人とのふれ合いを行うことが出来るようになりました。なお、古民家ではパレスチナとイスラエルからの留学生の交流会も行いました。併せて、周辺の森、林の下草刈り等を実施し、いきもの観察道として裏山遊歩道を整備しました。

今後は地元である刈羽村及び油田集落との密接な連携協力をとりながら継続的な会運営等に当たることが課題と言えます。なお、この民家は中越沖地震で被災しましたが再びボランティアを中心とする活動で活用が可能となっています。

付言すると、この建物は新潟県フィルムミッションにも選出されており、ある日映画やテレビでお目にかかる機会があるかもしれません。

最後になりますがこのような報告の場を与えて頂きありがとうございました。皆さんも是非一度、油田の地に足を踏み入れ、環境の中に溶け込み、里山と民家が一体となった「子どもたちの古民家」を堪能ください。



図5 古民家を拠点とする自然活動
田植え

受賞(作品) : 箔座ひかり蔵
受賞者 : 水野一郎+金沢計画研究所

新旧のコラボレーション

文 : 水野 一郎

(金沢工業大学環境・建築学部建築学科教授、株式会社金沢計画研究所顧問)

新旧のコラボレーション

「ひかり蔵」の設計に当たって考えたことは、地域の伝統を大切にしながら私達の時代のデザインと共生させたいとの想いでした。それは、パリやロンドンでも、ドイツやイタリアの小さな村でも見られたことですが、昔からの伝統的な建築を保存しながら現代のデザインを付加することで新しい機能が入れ込まれ、2つの時代のコラボレーションが成立している事例に出会い、感心したからです。極端な事例ですが、皆さんよく御存知のルーブル美術館でのI.M.ペイのガラスのピラミッドやドイツ連邦議事堂でのノーマンフォスター設計のキューボラのような新しい付加によって古い建築がコンセプトから動線計画に至るまで生まれ変わり、新たな活力に満ちていたからです。

このようなコラボを目指して伝統的な建築を築いた先人の空間、形態、素材、ディテールに敬意を表しながら、新しい機能とデザインを取り込ませることを許していただくという対話を重ねるプロセスは楽しいものでした。

金箔を貼るのはこわい

金箔は金箔製造では日本の98%をしめています。金箔の主な用途は仏壇、仏具、屏風、什器であり、江戸までは社寺やインテリアなど建築分野にも使われ、最近では化粧品や飲料にも使われます。明治に入り建築の使用は減少し、さらに今は金箔仏壇が少なくなるなど大口の需要が縮小しています。

15年程前よりそのような状況を受けて、金箔を建築の内外装に使えないものだろうか考えるようになりました。しかし、私自身はもともと設計の中で金箔を使うことはセンスもおしゃれもない成金的な愚趣味だと捉えていた方なので、慎重にならざるを得ませんでした。

海外へ出掛ける度に金箔使用の建築を探し歩きましたが、タイ、ミャンマー、中国華南、インドにも、トルコ、エジプトにも、パリ、ウィーン、ローマにも数多くの金箔シーンがありました。もちろん、金閣寺も中尊寺金色堂も拝観しましたし、カウディーや、オットーワグナーなどの近代建築にも金箔がありました。その多くが美しく力感のある佇いを見せていたので、少しずつ金箔は使えるのではと思うようになりました。

「箔座 ひかり蔵」は箔使用製品の小売店舗でしたので「金箔を伝統的建築に付け加える」との想いが生まれてきました。また、建物は国指定の伝統的建造物群の1つでしたので、外観は復元ですが、内観は若干の変更が認められていました。あれこれエスキースしたのち、中庭の奥にあった漆喰の蔵を金箔蔵にすることにしました。

外壁は設計図書に金箔貼り」と記したのですが、下地処理、接着剤、金箔の種類等の仕様書は書けず、施主である箔屋さんに一任しました。イ



図1 1階平面図



図2 中庭 立面断面図



図3 蔵の外壁に金箔を貼り、ひかり輝く中庭を創出



図4 2階縁側より蔵を見る



図5 蔵内部

インテリアは高山の左官作家狭土秀平さんの個人技にこれまた一任しました。金箔を建築に使う仕様書も技術案内も全く無かったからです。

金箔は上品で力強い

金箔を貼り終えて最も感じたのは金箔壁の力強さであり、それは人を圧倒するような強さではなく、静かに佇みながら輝く上品な強さでした。特にこの蔵は狭く多少薄暗い中庭の樹木の奥にある関係でより静かに佇んでいます。その中庭に短い時間陽光がさしこみ、蔵の壁が光り輝く瞬間がありますが、その輝きが中庭の樹木を通して店に達し、さらに細いきむすこ格子をすり抜けて観光客がそぞろ歩く街路にまで届きます。

このように今回は金箔をほとんどインテリアのような奥の空間に使用したので、街並みには影響のない控え目の安全圏です。次回は街並みを担う外壁に金箔を使わなくてはと想うのですが、いやらしいとか悪趣味だとか街並み壊したとかの印象を乗り越え、上品で力強く美しい金箔外観となるにはどうしたらよいか宿題です。

受賞（作品）：福井市至民中学校
受賞者：有限会社 設計工房顕塾、株式会社 構造計画プラスワン

北陸の建築文化をうけて生み出された 福井市至民中学校

文：柳川 正尚（設計工房顕塾 代表）

「チカラある建築」に刺激され生まれた至民中学校

至民中学校のプロポーザルが開催された夏の平成16年7月3日、JIA北陸支部・富山県建築士会主催の『呉羽中学校魅力の再発見』というシンポジウムと見学会がありました。至民中学校のプロポーザル特定を知らされた直後、その会場に参加していた私は、呉羽中学校のような中学校をつくろうと、決意を新たにすることを思い出します。

呉羽山は、若かりし頃から福井で地域の設計家を目指す有志と共に、呉羽の舎（白井巖一氏）や呉羽中学校（吉阪隆正氏）などの名建築に日参した地でした。多くの方がご存じと思いますが、呉羽中学校は、吉阪隆正氏により昭和34年に設計された、素朴でありながら迫力のあるすばらしい建築でした。見学会で中庭に入ると、改修によって様相が少し変わっていましたが、ひょうたん型の中庭を取り囲む、馬鹿でかい栗の丸太の手摺り、桧の窓枠、木製建具が入って、これらが外壁のコンクリート打放しと調和して、力強くやさしい空間だった竣工当時の姿がすぐに思い起こされました。また、中庭を囲むベランダは、様々な用途に使用され、今の学校にはない「工夫して使用すること」によって生まれる自由な空間となっており、ハードとソフトが一体となって先生・生徒の夢を育む工夫が施されていたことに改めて気づかされました。そして、シンポジウムで発表された先生・生徒・卒業生・地域の人の思いあふれる言葉一つ一つを聞き、また「呉羽中学校の50年史 光みつる藤が丘」を読むにつけ、より一層感動が深まり、この「チカラある建築」が、懐かしい思い出とともに、新しい学校づくりへの夢と決意を、私に与えてくれたのでした。

至民中学校の設計は、そのような呉羽中学校との偶然で感動的な再会の日からスタートしたのです。残念ながら、その呉羽中学校は、もう解体されてしまいこの世に存在しないことが、極めて残念でなりません。そして、その5年後となる今年7月、思い出の富山の地にて、そんな運命から完成した至民中学校に北陸建築文化賞を頂けたことは、何かの因縁であるように思えてなりません。

未来を見据えた教育を支える器としての至民中学校

福井市至民中学校は、福井市の郊外住宅地を校区とする生徒数約540名の中規模中学校です。周辺環境の変化に伴う移転改築を一つの機とし、「教科センター方式」をさらに独自に展開させた「異学年型教科センター方式」という運営方式を採用し、20校以上ある福井市中学校全体の教育改革を図る拠点として位置づけられ、計画を進めることとなりました。

そこでは、これまでの公立中学校の「学び」や「暮らし」を大きく一新させる「改革を支える空間・建築」が求められました。そのため、公立学校として受けるコストの制約は大きいものの、「学校」を単なる「教育施設」



図1 至民中学校 全景



図2 しみんホール 外観



図3 曲線を用いた内部空間



図4 様々な授業形態を支える教室空間



図5 中庭からのホームの風景

とは捉えず、教育・学びや暮らしのすべてが「文化活動」であると捉え、子供達そして地域の人達によって生み出される「地域の文化想像の拠点となる場」としての建築・空間づくりが大きなテーマとなりました。

その建築、学校づくりの特徴として、次の3つのポイントが挙げられます。

1. 新しい教育の実践と一体となった特徴的な学校空間の構成
2. のびやかな建築空間の実現にむけた構造設計・技術との協働
3. 使い手・作り手など多くの人々が知恵を出し合った学校づくり

これらは、「時代に応じた新しい教育を目指す」という目標に向かい、運営（ソフト）と建物（ハード）の双方を同時につくりあげるために、教育と建築の関係者がともに刺激し合い、議論し合った中で生み出されてきた特徴といえます。

そして、至民中学校では、「異学年教科センター方式」を採用し、生徒や先生によって生み出される多彩な「文化活動」としての学び・生活を支え、それらを風景として引き立たせ、新たな文化づくりへの刺激としていくための建築として、「柔らかい学校建築」を目指し、設計を進めてきました。

現在その中では、活動と建築が一体となって、全国のどこを探してもない、新しい中学校の風景・学校文化が生まれています。福井にお越しの際は、是非一度、生徒・先生・地域の方たちによる活気あふれる地域文化づくりの風景をのぞきに、お立ち寄りください。

受賞(作品) : 鯖江市中河小学校+鯖江市環境教育支援センター
受賞者 : 大野秀敏+吉田明弘/株式会社アブルデザインワークショップ
藤田肇/藤田肇建築建設事務所

鯖江市中河小学校・鯖江市環境教育支援センター

文 : 吉田 明弘 (株式会社アブルデザインワークショップ)

鯖江市中河小学校校舎改築工事

○ふるさとの川と緑を取り込む

鯖江市に建つ12クラスと複式学級1クラスをもつ小学校である。敷地西側を流れる浅水川は、澄んだ清流に魚が泳ぐ、まさに故郷の小川である。何とか川が身近に感じられる校舎にしたいと考えたが、敷地に立つと高い堤防の法面が邪魔をして川面を身近に感じる事が全くできない状況であった。堤防のレベルがちょうど建物の中二階であることを発見した事から、児童がよく使う共用諸室(図書室、パソコンコーナー、段差を利用した劇場風空間)からなるラーニングセンターを同じレベルで連続させることで、上下階から半階上がり下りすれば到達でき、同時にふるさとの川の存在を意識できる場所とした。「シアター」は発表会や作品の展示、読書や友達との交流の場など様々な活動に利用され、とかく分断されがちな上下の階(上級生と下級生)を流動的に結びつけるコミュニケーションの場として機能させた。堤防沿いの敷地をラーニングセンターの外壁まで拡幅することで市民が自由に使える遊歩道「川端遊歩道」として地域に開放し、校舎内部の様子が見える開口を設けた。学校を地域から隔離するのではなく、学校が地域に見守られるようにしたのである。

○教室の構成

中高学年の教室は2学年分4教室を南面させて1クラスターにまとめ、4教室で1つの多目的スペースを共用している。最上階であることから、多目的スペースの天井を自由に高くとることができ、欄間窓から十分な採光と換気が得られる。低学年棟は、野球場の外野形状の影響から、教室は多目的スペースを囲むように配した。その結果南面しない教室も出来たが、低学年に相応しい親密な雰囲気となった。教室の窓にはライトシェルフを設け、障子風の拡散装置と併用することで、光環境の改善をめざした。

○「雁木」と回遊性

グラウンド側の外部に「雁木」と呼んでいる2階レベルの外部通路を設けることで、冬季の雪囲いや避難動線とし、屋内通路と連結することで回遊性のある動線を確保している。

○木を多用した学校

構造面では、平面形を蛇行させたラーニングセンターに大断面集成材による大スパンの勾配屋根を架け、周辺の里山と小川の織りなす風景に溶け込むようにした。地場産材が杉材であることから圧縮して強度を増した杉板をフローリングに活用した。壁パネルは杉練付けパネルを使用している。多目的スペースでは、北側ガラス面の光量を調節する木スクリーンがそのまま屋根構造形状に合わせて包み込むインテリアとした。入れ子状に存在する先生コーナー、クワイエットルームといった小スペースはヒューマンスケールな木箱として家具的にデザインした。



図1 浅水側河岸からの遠景
(手前が環境教育支援センター、
勾配屋根が中河小学校)



図2 中河小学校ラーニングセンター
(図書コーナーよりパソコンコーナー
を望む)



図3 高学年多目的スペース



図4 環境教育支援センター南面ファ
サード

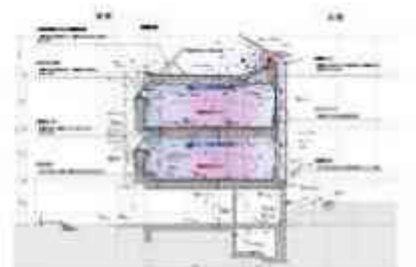


図5 環境教育支援センター環境システム
説明図

鯖江市環境教育支援センター

鯖江市は市民の環境に対する関心が高い地域であることから、環境NPOによる市民活動の拠点となり、地域の小学校や中学校の環境教育の場となる施設として中河小学校の敷地内に計画された。設計に際し、自然エネルギーの活用を第一の目標に置いた実験的な建築を目指した。

○換気

西側は遮るものが少なく川筋に沿って常時風が吹いているので、屋根に恒常風を受けるラッパ状の整流フィンを設け、そこを風が吹き抜けるときのベンチュリー効果で室内に空気流を起こす換気システムを採用している。

○ハイブリッド空調

通風と機械式空調を組み合わせたハイブリッド空調を採用した。また、ペリメーター部の負荷は、井戸水を利用した冷却用のラジエーターを南側窓部に設置した。

○光の制御

南側の窓にライトシェルフを設け、部屋の奥まで光を届け、室内の明るさの均整度をたかめた。また、ルーバーによる直射日光の遮断も行っている。

石造による雪室の展開

黒野 弘靖

(新潟大学工学部建設学科 准教授)

新潟県には、素材としての石の特徴をよく表した伝統的な建築がある。それを紹介し、「素材と建築」というテーマへの参考としたい。

ここで対象とするのは、岩の原葡萄園（上越市北方1223）の石蔵である。この葡萄園は、川上善兵衛が明治23年（1890）に開設した。自宅の庭園を葡萄畑とし、主屋の脇に葡萄酒の発酵と貯蔵のための石蔵を建てた。それが第1号石蔵（明治28年（1895））と第2号石蔵（明治31年（1898））として現存し、それぞれ登録有形文化財、上越市指定文化財として保護されている。両者ともに現役のワインセラーとして使用されており、第2号石蔵は一般公開もなされている。

第2号石蔵は、長手の側面に前室がつく。そして全体に切妻の大屋根が載る。壁は、最低部から1m強の高さまで玉石積み、その上部は切石で組まれている。

この石蔵は敷地の外れの窪地に立地している。そのため敷地の中央からは、下がってアクセスする半地下式となっている。前室がついているのは、このレベル差を処理するためであり、前室内部は斜路となっている。

こうした地形を利用した建て方や石組みの特徴は、この石蔵が雪室（ゆきむろ）から始まったことを示している。

新潟県では、氷を貯えておく室を雪室と呼ぶ。地面を1m以上掘り、玉石で土留めし、冬期の積雪を入れて蓋をし、夏期に取り出して使用した。屋内のものも屋外のものもあり、各地に残っている。川上善兵衛は、これをワインの低温発酵と貯蔵に利用したのである。

雪室は冷蔵庫なので、人が入ることはない。しかし、岩の原葡萄園の石蔵は、雪が入るだけでなく、人が樽を出し入れするため、内部空間をもっている。

前室の扉を開けると、斜路が下っていく。一方でヴォールト天井は同じ高さを保っている。両脇の壁には、石積みの上に切石のピラスターが立ち、この天井を支えている。斜路を降りきったところの上部にアーチが架かる。その粗い石の一つ一つに岩乃原葡萄園第二号石蔵の文字が刻まれている。その先の鉄扉を開けると、玉石積みの壁で囲われた、暗く広い石蔵へと至る。

こうした内部空間は、ワインを低温で発酵させ貯蔵するという目的に沿って、石材が選ばれた結果ともいえる。ただ、上部に西洋建築の技法を用い、下部の伝統的な雪室と組み合わせたことは、川上善兵衛と棟梁・古市新十郎の創意である。それにより、それまでには見られなかった雪室の内部空間が現れ、地底の別世界に降りていくという、西洋の古代神殿のような空間体験がもたらされている。



図1 石蔵前室



図2 石蔵外観

アルミハウスプロジェクト

宮下 智裕

(金沢工業大学環境・建築学部建築学科 准教授)

アルミハウスプロジェクトでは、産学官連携の実践的な試みとして「北陸の主要産業の一つであるアルミという素材の有利点を活かす」ことを主軸に、施工、運用・維持管理、再生・再使用といったライフサイクルにおいてトータルな省CO2環境共生型住宅の開発を目的としています。

2005年に発足した産・官・学協同のプロジェクトは現在、金沢工業大学宮下智裕研究室、アトリエ・天工人、山下保博を中心とし、現在20社の企業協力を得て進められており、関東で2棟の住宅を竣工、そして、金沢市内に建設中のアルミハウスでは、これまでの開発を集約したものとなり、国土交通省平成20年度（第1回）住宅・建築物省CO2推進モデル事業として採択されています。

アルミハウスでは、住宅の構造体として、一つのアルミ基本型材によって柱、壁、梁、スラブを構成する変形のデッキプレート型を用います。このアルミ型材を4面リング状に組み上げたものをアルミハウスの基本構造とし、ジョイントは一般の大工や工務店でも施工が可能なようにL型プレートを組み込む形状での簡素化を図っています。これにより、現場での施工性を向上すると共にリユース性の向上をもたらす事が狙いです。

また、今回の開発の最も大きな特徴は、このアルミ構造自体が冷暖房のシステムを担っている点であると言えます。構造体をアルミ特有の高い熱伝導率を生かした“輻射冷暖房装置”に置換することによりエネルギーシステムの効率化を図り、冷暖房における省エネルギーに大きく貢献する事が可能となります。この効果については、竣工後も金沢工業大学・永野研究室と共に検証を行ってまいります。この構造体にユニットバス・キッチンといった機能を付加した複合利能体ユニットとしても成立させています。

さらに、変形のデッキプレート型の構造体の内部スペースを使ってLEDを用いた照明を埋め込むことで、構造体と照明とを一体で計画しています。全ての照明をLEDとし、アルミの反射を用いながら効率的かつ魅力的な生活シーンに合わせた分散型の配灯計画を行う事で、従来に比べ大幅な省エネルギーが可能となると考えています。

使用するエネルギーには積極的に自然エネルギーの活用を試みている事も大きな特徴と言えます。地中熱エネルギーの活用及びソーラーパネルを始めとした現在普及しているシステムの組み直しを図り、パッケージ化することで汎用性の高い“自然エネルギー活用ユニット”を開発しました。このエネルギー活用システムを輻射式冷暖房システムの熱源に用いると共に、エコキュートの利用やオール電化も行い、設備の総合的な省エネルギー化を促進することがその狙いです。



図1 アルミハウス省CO2概念図



図2 アルミリングモックアップ
構造体と照明の一体化



図3 アルミリングシステム



図4 アルミニウム構造現場

素材の妙？

五十田 博

(信州大学工学部建築学科 准教授)

学生時代から一貫して木造建築の研究をしてはいるものの、所属していた研究室は木材が専門というわけではなかったようだし、最近は縁あって木材以外の材料を対象に実験などをする事が多い。先日は鉄板を張ったPC壁の強度実験を実施したり、アルミニウムを木造の耐震補強に使おうとアルミニウムフレームの実験をやったりしている。レンガも実験したし、最近は鉄骨造と木造のハイブリッド構造から鉄骨造だけの構造までも研究対象になってきている。

改めて構造材料の適材を論じるつもりはないが、やはり鉄という材料は設計したとおりに壊れてくれるので扱いやすい。一方、コンクリートや木材は思いのほか強かったりもろかったりする。また、素材感ということになるとやはり木材の肌触りがいいとか、温かみがあるとかいふことになる。で、日本人は木材に愛着があるとか言う話をよく聞く。以降の話は多少、東京大学生産技術研究所腰原先生の受け売りだが、なぜ日本人が木材を好きなのか？に関連して探した偽の木材についての一話。

まず、木目があるけど木材で作られていないもの。まさに偽の木材。壁紙、机、歩道、ベンチ、建築を離れても、弁当箱、なんかすぐに思いつくが、探し始めると結構ある。次いで、わざわざ木材で作らなくてもいいのになっていう木材で作られたもの。名刺、パソコン関連製品（マウス、ディスプレイ）、自転車、車。

木材の有効利用も必要だが、適材適所ってものもある。パソコン製品は幾分行き過ぎの感がある。ついでに、食べ物で木材みたいなものを探すとバームクーヘンにブッシュドノエル。はたして木目や木材っておいしく見えるのだろうか。



写真1 木目調弁当箱



写真2 木目調歩道

建築素材の再発見 赤瓦

国京 克巳

(若越建築文化研究所 代表)

どの地方にも特産品がありますが、福井はすいせんやカニが有名です。建築に関係したものとしては越前和紙が有名ですが、江戸時代には笏谷石や瓦も有名な産物でした。笏谷石は地元福井でも花崗岩にその座を奪われて久しく、さらに近年採掘が中止され、その面影はありません。しかし、日本海側各地の神社の鳥居やお寺の石塔や祠、さらには立派な町家の基礎や敷石などに使用されています。笏谷石は研究対象として多くの人に取り上げていますからご存知の方も多いと思います。

一方、瓦はあまり知られていませんが、笏谷石と同様に江戸時代末から明治時代初めにかけて北前船により福井県から北の日本海沿岸の地域、遠くは北海道まで運ばれ、使われていました。寒い北海道に瓦とはおかしいと思いの方もおいでかと思いますが、ぼつぼつと建物に瓦が使用されているのです。瓦の研究者によると、江戸時代末期には福井の瓦技術が石川県・新潟県・秋田県にもたらされていたそうで、古文書には職人が出向いて瓦を焼いた記述が残っているそうです。瓦といっても福井の越前地方は釉薬を塗った赤瓦で、若狭地方では燻した銀鼠の瓦です。

しかし、このような繁栄を究めた福井の瓦も時の流れとともに、赤瓦は紺色そして銀鼠に変わり、一目ではどこの瓦かもわからないようになってきました。古いお寺の赤い屋根も近年葺き替えによって銀鼠となっています。そして地元の特産瓦は大手瓦メーカーにその販路を奪われつつある状態となっています。また、若狭の燻し瓦は最近生産が中止されたと聞ききます。

ところがこのような中、福井県では最近赤瓦の復活が新聞紙上をにぎわすようになってきました。福井市の福井城舎人門復元をはじめとして寺院本堂の修理に赤瓦を復元して使用したのです。また、復元ではなく、既存の赤瓦を再利用して本堂や町家を葺き直す修理もおこなわれています。このように着実に赤瓦の使用が増えてきています。究め付けは函館でもうすぐ完成する復元奉行所で、赤瓦の量に圧倒されるのではないのでしょうか。

この赤瓦の復活の契機は建物の復元という一時的な要求からでしょうが、民間の建物の修理や新築で、赤瓦が使用されるようになるということは大きな変化です。赤瓦が再び一般の人々に建築材料として認知されたと言うことです。もちろん、昔の技術のままでは採用されませんから現代的な技術をともなった赤瓦の利用と言うことになります。その判断の中心には我々の仲間の建築関係者が大きな役割を果たしていたことは想像に難くありません。今までどおりのものでなく、一度腐れたものを復活することは並々ならぬ努力と忍耐と情熱が必要となってきます。それも一人によってできるものではなく、多くの人たちの協力があって初めてできたことなのです。

赤瓦の葺かれた建物をみると、木々の緑と赤のコントラストが実に美しく、一色ではなく光によって赤から銀へと多様に変化する今の瓦にはみられない味わい深さがあります。冬の日本海側のどんより曇った景色に沈む銀鼠の屋並も美しいですが、それが赤い屋並に変わったらどんなになるだろうかと想像するだけで、心が踊ります。

このように建築素材には時代の流れや生活スタイルによって一度捨て去られたものがたくさんあります。我々建築に携わる者は、現代的な新たな視



写真1 赤瓦の法雲寺本堂



写真2 緑に映える復元赤瓦



写真3 幅復元された舎人門

点をもって、新素材と同じように廃れた素材、忘れ去られた素材に目を向ける必要があります。それは今流行りの環境に優しい材料を使用することだけでなく、文化の継承を建築の立場から押し進めるために。

私の景観研究の始まり

長田 亜美

(福井工業高等専門学校 環境都市工学科5年 江本研究室)

私は、福井工業高等専門学校(以下、福井高専)環境都市工学科で学生生活を送ってきて、今年で5年目になります。

福井高専環境都市工学科では、人々が安全・安心・快適に暮らせる「環境都市」づくりを理念として、土木工学の基礎を習得し、防災や情報処理に関する知識、環境問題に対する知識を身につけた、技術者の育成を目指しています。平成19年度入学生からは、建築系科目を含めた総合的な建設技術者を目指した新カリキュラム体制となりました。卒業後、カリキュラムの中で指定された科目の単位を取得すると、本学科卒業後4年間の実務経験で、一級建築士、二級建築士が受験できるようになりました。

現在まで、土木分野の様々な専門教科を学んできましたが、その中で特に、都市計画について興味を持ちました。私が入学当時には建築系はまだ導入されておらず、建築を専門とする先生が来られたのは私が4年生の時でした。そして4年生の秋頃に、建築でも都市計画がされていることを知りました。私が、学んできた土木の都市計画は、安全面や公共面を考えた都市計画ですが、建築の都市計画は景観やデザイン面も考えた都市計画だということを知り、とても興味を持ちました。そして、建築のカリキュラムが導入されていない私たちも、5年生の卒業研究で、建築を学べる機会があると知り、研究に取り組みたいと思いました。

また現在、卒業研究で、福井県を対象とした中心市街地活性化に関わる街路空間の安全性と景観に関する調査を行っています。地方都市の中心市街地は、衰退化が進んでいますが、中心市街地に集積する都市基盤機能を充実させ再構築することで活性化につながると考えられます。そこで、研究では、福井県の中心市街地の街路空間を対象に安全性、景観の両面から、総合的な観点で現状の街路空間特性を把握・評価し、影響を与えている要因や箇所を明らかにすると共に、各街路の整備の特徴や改善の提案を行うことを目的としています。

現段階では、県内の福井市、大野市の中心市街地を選定し、現地調査を行っています。いずれも駅周辺を中心に活性化や景観に配慮して整備が行われた街路を対象として、福井駅前、越前大野駅周辺を選定しています。普段、何気なく利用している街路空間を隅々まで調査することで、様々な実態が分かると同時に、とても楽しく調査を行えました。

今後の計画としては、実態調査の結果をもとに、バリアフリーを中心とした安全性と景観に関するアンケート内容を作成し、選定した街路で様々な歩行者特性をもつ被験者による歩行実験を行い、その評価を分析して各街路の改善等の提案を行う予定です。

私は、来年から本校の専攻科に進学します。高専の専攻科ではさらに2年



写真1 福井駅前の街路



写真2 街路空間の調査

間、研究を続けることができるため、今年を含めて3年間で建築に関する知識を高めつつ、景観に関する研究を進めたいと考えています。

学生による語り合いのシンポジオン2009を終えて

加藤 智子

(富山大学芸術文化学部 造形建築科学コース 3年)

学生による語り合いのシンポジオンは、建築学会北陸支部大会の中で学生が主体となって開く会です。同じ地域に住みながら普段は離れた場所で活動をしている学生が、年に一度集まり「地域の諸問題を対象とした設計・制作活動」というテーマでそれぞれの活動を発表します。また、このシンポジオンでは、学生同士の活発な交流も目的のひとつなので、発表形式も発表者と聞く側との距離が近く、発表後には語り合いの時間が設けられていることも大きな特徴です。今年は昨年度より参加数も増え、5つの大学・専門学校から9つのチームが発表しました。さらに、新しい試みとして、学生が司会進行を進めたことも印象的でした。

学外で発表するという体験は自分の経験値を上げ、他の学校の発表を聞くという体験は自分の世界を広げることができます。また、この会の大きなテーマである「語り合い」の時間は個々の作品を制作者と話をしながらじっくりと見たり、自分の作品についての率直な意見を聞くことができます。ここでは他大学の学生や先生方と、かしまることなく自由に和気あいあいとした雰囲気の中で意見交換ができます。様々な方に自分の作品を見て頂くと、自分では気付かなかった点のご指摘やアドバイスも多くもらえ、とても勉強になりました。

わたしは昨年につき2回目の参加でしたが、この会が終わるときにはいつも、来年もまたここに来てもっといい発表ができるようになりたいという気持ちになります。私にとってこのシンポジオンは、自分を客観的に見つめなおし、ステップアップへのやる気を導いてくれる、とてもよい機会です。

都心に比べ、地方は学校数も少なくそれぞれが離れているためなかなか交流が生まれません。そんな中で開かれているこの貴重なシンポジオンに、多くの学生が参加することを期待します。今後は、こういう会で知り合った仲間と学校や地域を超えて一緒にプロジェクトをやってみたいです。



シンポジオン風景 1



シンポジオン風景 2



シンポジオン風景 3

設計コンペを通じて

斎藤 淳之

（新潟大学大学院自然科学研究科環境共生科学専攻修士1年 建築計画研究室）

大学院での生活はあっという間に過ぎてしまいます。そんな短い時間を有意義に過ごすために、私はいくつかの目標を立てました。その一つが設計コンペに応募することです。

去る7月、私は日本建築学会設計競技「アーバン・フィジックスの構想」に応募しました。このコンペでは計画対象の所在地を所轄する支部に応募します。各支部で支部審査が行われ、そこでの入選作品が全国審査の対象となります。全国審査では1次審査で入選作品が決定し、2次審査ではプレゼンテーションが行われ、各賞が決定されます。

提案は、ガソリンスタンド（GS）のコンバージョン計画です。近年、日本のGSは減少傾向にあります。GSはその構造上、転用に多大な費用がかかるため、その跡地利用は進まず、放置されている現状があります。私は、GS跡地がその地域の余白となっていると考えました。そこで、GSの持つ空間的特性である〈半屋外空間や地下貯蔵タンク〉と日本海沿岸地域の気候特性〈冬の降雪量の多さ〉をあわせ、GSを〈雪室をもった公共空間〉として転用するということを提案しました。敷地は新潟から青森までを結ぶ国道7号線（R7）としました。この地域は高速道路が開通しておらず、自動車での移動が一般的な地域で、R7は重要な幹線道路といえます。都市→郊外→農村と様々な特性を持った場所を通るR7で、それぞれの地域に見合った小さな空間を作り上げます。GSは自動車とドライバーのものから地域住民のものへと変化すると考えています。

結果は支部入選で、残念ながら全国1次審査を通過することはできませんでした。アーバン・フィジックスという耳慣れない言葉に戸惑うこともありましたが、自らにとって身近なテーマに取り組むことができ、非常に充実した時間を過ごせたと考えています。

こうしたコンペの魅力は学外の方に評価していただけることだと思います。応募している方も、様々な大学・地域の学生、社会人、さらには海外在住の方もいます。さらに、コンペは大学の製図課題とは一味違うテーマが与えられます。その解釈の仕方や敷地の設定などにより、作品はまったく違うものになります。様々な視点で物事を捉えるということの重要性を学ぶことができたと思います。また、自分の提出したコンペでは、たとえ入賞できなかったとしても、入賞作品をみて受ける刺激が大きいと思います。今後、公開審査会などへも積極的に参加したいと考えています。また、パネルで自分の考えを表現することは難しく、表現方法の技術向上にもつながったと思います。

日本建築学会設計競以外にもいくつかのコンペに応募をしました。入賞することはまだ少ないですが、出し続けることで学ぶことも多くあります。



図1 転用イメージ
〈カフェ+バスケットコート〉



図2 転用イメージ〈図書館〉

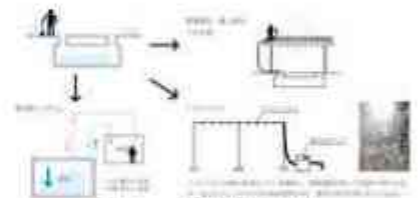


図3 雪活用する方法

地方の学生は、都市部の学生と比較して建築に関する情報量が少ないと思います。そういった状況下でも、コンペに取り組むことは情報を得て、視点を広げる一つの方法だと思います。また、その地方の特色を活かした提案を考えることは、地方に住む学生の大きな強みではないでしょうか。

今年に入り、コンペやワークショップ、学会発表、インターンシップなど学外での活動に多く参加し、大学内ではできない様々な経験ができていると思います。このようなことに今後も積極的に参加し、自分の視点を広げていきたいと思っています。

地域志向型のまちづくり支援の試み (福井県福井市と池田町における事例)

内田 奈芳美

(金沢工業大学環境・建築学部建築系 建築都市デザイン学科 講師)



福井市東郷地区

政府の縮小や要望の多様化などにより、本来行政が行うまちづくりの部分にも地域住民が主体的に関わってくる「新しい公共」分野が拡大している。また、その中の施策の一つとして、行政による住民への競争的まちづくり助成金の制度が増えている。これは大体において協働の条例とセットとなり、地域住民の主体的な関与を促すものとなっている。地方分権が進み、NPOなどの担い手が生まれてきたことを背景として、2000年以降特に増加している。

全国の動き同様、北陸地方の自治体でもこのようなまちづくり支援の制度が増加している。特に福井市と池田町の試みは独自性があり、注目に値する。例えば福井市では、私が子どものころ住んでいた時は当然のものとして受け止めていたが、公民館を中心として自治会による地区活動がさかんに行われていた。当時はもちろん「まちづくり」という言葉はあまりなじみがないものであったが、今日において公民館は地域のまちづくり拠点として役割を果たしているようである。地域に根付いたこの小学校区と公民館をセットとした近隣住区的システムと、まちづくり助成金が連動した制度が、「誇りと夢・わがまち創造事業」という名称で現在福井市にて行われている。この制度では一地区(小学校区)につき一組織がまちづくり提案を出し、審査を経て助成を受け、事業を行う。この助成を受ける組織は主に自治会をベースとして組織されるものが多いという、地域志向型の助成制度である。

実はまちづくりの競争的助成については、自治会向けというのは日本ではそう多くない。大体がNPOなどのテーマ型、もしくはプロジェクト志向型の組織からの提案に対して助成を行うのが全国的な流れである。もっとも、東京圏では圧倒的にNPOの数も多く、受け手が数多く存在しているという背景がある。また、その一方でNPO向けの助成では実際のところ応募者の確保に苦勞している例も存在する。そういった中で、住民主体のまちづくりプロジェクトを着実にやっていくという点で、福井市の例は実用的な試みである。本助成金を用いた地域づくりとして、例えば図の東郷地区の例など、地域の中心を流れる川を中心として、地元の古い民家などの地域資源を活かしたまちづくりが行われている。

また、福井県今立郡池田町でも「池田町まちづくり自治制度」という面白い試みが行われており、これは「ふるさと納税制度」を用いた画期的な試みである。ふるさと納税制度でお金を納めた人の中から委員を選び、どの住民プロジェクトに資金を出すか決定するプロセスに関わってもらう。担当者の方に話を聞いたところ、やはり町を出る人が多い中で、池田町をよくするために選んで外から納税する人にとってはこのお金にはいったいどのように使われているのかという思いがあるはずであり、それに答えるための制度であるとのことであった。

これらの制度は、「新しい公共」の担い手を育成するだけでなく、地域住民の創造性を促進するものである。北陸においては人口縮小による新たな都市のあり方が問われるが、創造的・地域運営の嚆矢として、このような制度に着目したい。また、こういった事例は、外にいる出身者が果たして地域外から地域運営に関われるのか、という今後の都市縮小の時代における新しい問いを投げかけるものでもある。

稲核の風穴群

梅干野 成央

(信州大学工学部建築学科 助教)

国土の大部分を山地が占める日本では、古くから、山の恵を得ながら、生活がいとなまれてきた。樹木を伐採していたソマや鳥獣を狩猟していたマタギなどはその顕著な例である。こうした山の恵のひとつに、山から吹き出る冷風がある。冷風が吹き出る場所は風穴とよばれ、そこでは冷風をいかして様々なものが冷蔵されてきた。風穴には、洞穴のかたちをしたものと斜面を掘削して建設したかたちのものがあるが、いずれのものも、自然に吹き出る冷風を利用した、いわば、天然の冷蔵庫である。

長野県松本市安曇の稲核(いねこき)には、18棟の風穴が遺存している。すでに利用されていない遺構を含めれば、その数は38棟にもなる。稲核は、上高地から流れ出る梓川の上流域に位置する集落である。梓川をつくった河岸段丘の上に里があり、そのすぐ背後に山がせまっている。風穴は、多くの場合、里と山の境目に群をなして分布しており、冷風が吹き出る斜面を掘削してつくられている。そのつくりは、斜面を掘削してできた壁面に石積みを築き、その上に木造の切妻屋根を構えるという形式が主である。そのため、石積みの一部分と屋根だけが地上にあらわれており、そのほかの部分は地中に埋まっている。里と山の境目の斜面にひっそりとたつそのたち姿は、まさに、隠れた建築であるといえる。

風穴の用途は、家庭用と業務用の二つに分類することができる。家庭用の風穴は、カザアナ、カザナと呼ばれることが多く、主に食料の冷蔵を目的として建設されたものである。とくに、稲核菜(いねこきな)と呼ばれる野菜を風穴のなかで漬けた漬け物は美味しく、地域の特産品にもなっている。一方、業務用の風穴は、フウケツと呼ばれることが多く、主に蚕種(蚕の卵)の冷蔵を目的として建設されたものである。蚕種を風穴で冷蔵することによって、蚕種の生理を害することなく、発生を抑制することができる。その商売は、蚕種冷蔵業と呼ばれ、日本に文明開化をもたらした蚕業の発展の一翼を担っていた。蚕業が衰退した今日では、植林樹の苗木や野菜の種子などが冷蔵されている。

このように、稲核では、古くから冷風という山の恵みを巧みに利用してきた。最近では、見学用の風穴の整備や風穴の仕組みを活かした製品づくりに取り組むなど、風穴の利活用が積極的に行われている。その生活は山と人の共生のいとなみであり、今にのこる風穴はその共生の歴史を物語る貴重な文化遺産であるといえる。



写真1 家庭用の風穴



写真2 業務用の風穴



写真3 業務用の風穴の内部